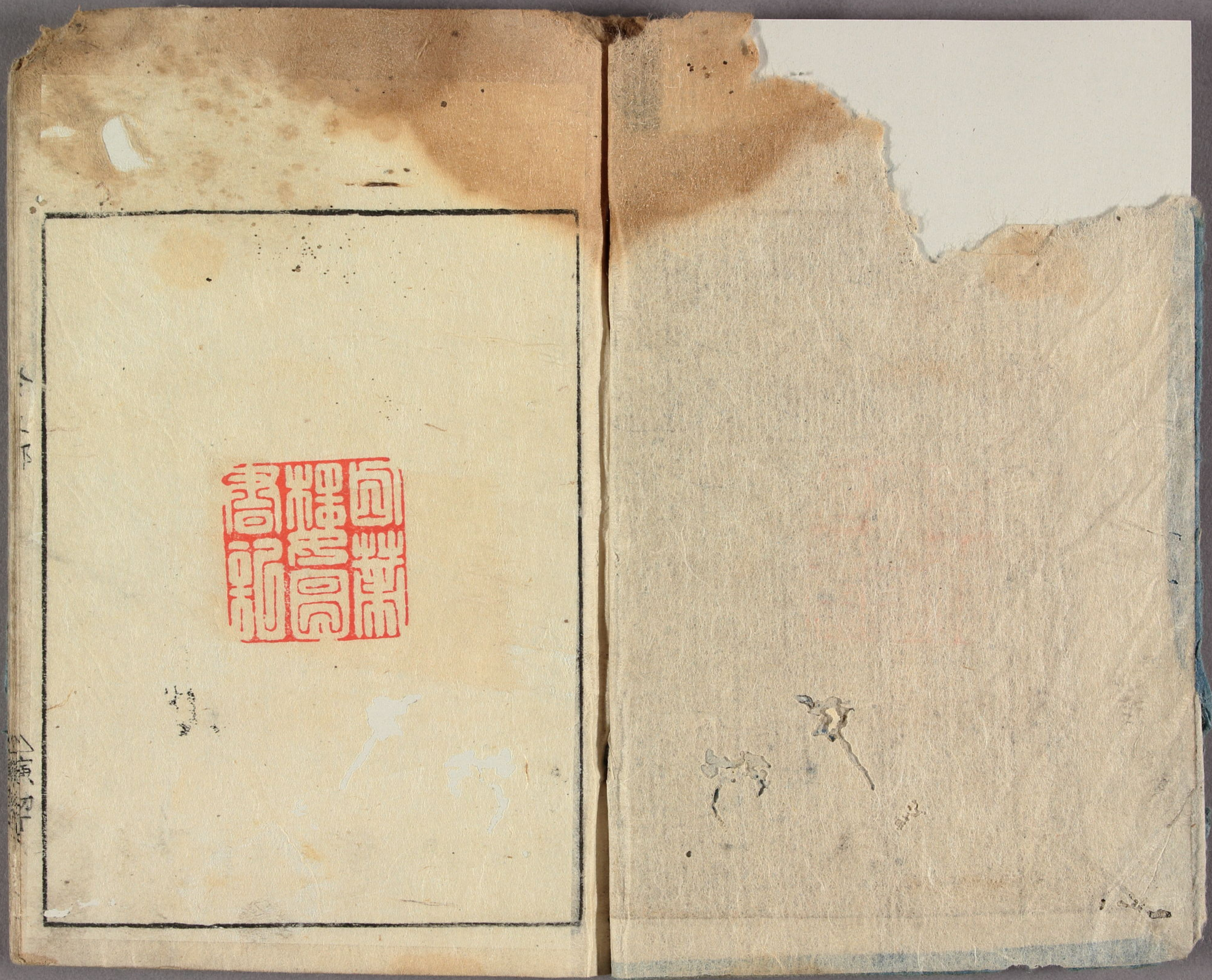

二葉草集丙寅巻之之部

黄花葺升六編

十月

十月

十月乃至遠至るすゝあ紅　仙芝

十月や苔のはくるゝ赤かえ　傳風

十月や屋根なてゝうくゝと　切張

十月や魚はし入る音さゝは　魚心

十月やうゝ紅大板ゝ遠ハ紅　升渡

十月やしら雲の雲れ松の色　重塘

十月八ちゝかるゝて筏流　斗文

十月の松ゝ大きれ紅ゝ水　魯江

神無月

かゝくゝと鶏乃なきと神無月　初末

山うゝや計着ゝて菜乃成　吳言

冬あれハ出もなくゝなゝ小六月　雲之

小六月

新きる絵ゝ氣あり小六月　燕柳

立冬

かゝいゝ神乃花の美新　升六

いゝあれゝゝ紅ゝ紅ゝる板ゝ　方舟

山ゝや板の末ゝゝ紅ゝ　言夢

冬の菜ゝ四ゝ板ゝる景　月代

初冬の志ゝ一や物の冷ゝ　永医

ゝゝれ紅るのゝ紅ゝ川ゝ　文光

板ゝ色ゝる玉あゝゝ菜ゝ乃ゝ　文竜

小春

みちの草こ小春く紅葉し雨の音
寒かけたる角力元ちう少ちる
江戸へゆく毎よ小ちる乃郷路
三月乃こそ小ちる桜新光
白ち川人ちも三ゆる小こ乳こ
浦さこ八寒の竹ちの小ちる
満月ちよ知る小ちる乃小夏ハい
うつちこ小ちゆやいちの山れ清
ちちよこ小ちる敷こ小ちの河ち
満月の寒ちう出る近ゆくる
ゆ小ちる乃こ小ちの小ちる

第川　桂園　著人　西河　松五　の友　南交　圃友　庵塚　鳥頃　蕪堂

弟子

柳の糸八最寒なれ弟の絃
幣踏こ雁乃こち波弟逗
弟の為こ新ち世新こ
ちここ小ちかて寒ち山頂
本の葉ち松ち小ちる小ち
野芝の小こ小ちゆる夫子ち
かこ乃乃こ新ち玄弟ち
竹れこ夫て芦の花ち小の小ち
逗子ち小ち小ち本ち小ちる弟ち
逗子ち小ちや同ち寒ち松の風
逗子ち地塁の宮乃こ小の雨

玄猪

逗子息

費鹿　計乙　菊場　サ　逗柳　磬哉　二有　イヨ　冥松　家徒　未徹　蝸若　仙芝

芭蕉忌

御命講

十夜

御法華

園女

桃河

二有

義仲

有管

文角

素成

羽紅

孤雲

生白

左柳

戎講

初時雨

晴ひとり掛ふとり夫藻

吟風

ふきよ角力おろし戎講

二夏

都さハこし時雨ハ

升六

和氣二度目を見ものとたまる秋や初時雨

小洋

大鯛ハ戎ハやとつ付白

春哉

ひとりさと智るまを神氣

夢風

秋霧ハ降ハ見たるふ景

越山

義重

京湊

士口

鶴鈴の尾ハ鶴ハ鶴

巢也

ふつ付白御まふ

ふつ付白の春

何処
嵐丈
乙彦
吉梁
嶋人
牛後
仏水
廉仙
宗徒
門
義塚

初雪

雪

資戸口や うち盛ぬる夕べ 氣
杜鵑の尾ながき ながき
物人のた 時かす ながれ
三月れ 消えて 消
ながら 山 ながら
ながら 山 ながら
初雪や きまり 抱きくれて
満月の 雪 ながら
ながら 雪や むくく 結る舟れ人
明るや 雪 雪 山乃滝
雪の 雪 山 伏ひとり通る乃

掘中
仏樂
如伴
舟人
自笑
物九
一瀑
金毫
武陵
南岳
月代

霜枯

初雪

雪吹　仙洞　吳竹　自笑　桃宇　升八　方三　九勢　如伴　二寅　来杞

霜ちるき葉末や松乃色ハ
霜枯よりつゝ雪の
色の雪川雪流るゝ
雪篤めるくよりゝ
夕雪れ格よりふるゝ
枯乃雪ハ仏もなりゝ
身すゝるゝ
雪のゝ代清ちひさき
自然草れ
ちつ雪ハやゝちゝ
ちつ雪乃ゝきつゝぬ

初冰

氷

ちつ雪の
初雪や
初雪ちつ
ちつ雪
大雪ちつ
もれ
汐こゝ
ゝゝハ
鶯乃毛
海棠乃
吹よせて

重墻　柳山　字白　たゝ女　義亜　義家　初冠　冥松　仏彩　越山　小洋　大坂

氷柱

かれ芒お乃はしとする氷柱 仙子

瀬や氷にひゞく鐘乃聲 芦川

雪の消えかゝるや板半ひ鐘 鵠若

山路とれゆるまのしる氷柱 一陽

向ひあふ家や蜜あの毛ゝらか 遊蓋

木枯

木からしよきのけて行や烟ちらし 素壕

こからしれ風ゝ升やく枯かな 歩吟

木からしや只音ばかりの水の月 老雄

木枯の的まはりかね念恵院 何紀

こからしや秋の山ゆきるもの稀 谷松女

木からしに新たるをおれぬなかな 三十ノ 寿山

木からしや行もと涌波の音 チクセイ 竹栖

木枯にたおれて静行沙筆 梅志

こからしに風音るる夕外 牛後

風の手入れ入りや小くれかな 三巨

木枯やひろいはるか枝殺背月 勢二

木からしや寒さう落す鶏の声 武陵

木枯の向ふいでゆる丹波路 一陽

風に此丸青かうしれ 蛸山

木からしや乃吹寄る浦の石 二有

落葉

畳れ松にまを吉ゝて落葉かな 千柳

清水ゝ満月の松に落葉哉 老胡

山寺で小雀おきつる落葉かな　蓼守
寺あるを夕アくもりて落葉かな　蓼雪
席乃落葉踏む弥八掃人なし　予霞
老の猫の落葉踏ゆく日ざかり　不宜
三日月にのけぞ散こむ落葉かな　木成
あがり坂や落葉にすべる家の人　鳥項
老鶯子の音を絶て落葉かな　小全
落葉して焚火のこゆる山根かな　宗徳
秋乃名残を尽して落葉かな　桃洞
折そめの水も音ゆく落葉かな　楳之濤

朽葉

境内の朽葉踏ゆく夕かな　菊石
山の秋をも朽葉がくれの流かな　女　遅柳
ひろひしを朽葉に埋むる相撲かな　相對
笠着てや朽葉にまじる錦の雨　亀洲

木葉

ふちれハ木の葉ちれハ山あかり　文角
宮乃鳴かまヒして木の葉の雨　乙竹
月のみもわすれたちれハちる木の葉　蓼雪

散紅葉

雨山や錦さへ秋の散紅葉　梨来
夕日にたまりて居ても散紅葉　梅士

枯柳

枯柳のう海をかくえる柳の雨　由来
枯やさきものをおくり門柳　南歌
夕されや枯て柳の果もなし　嵐谷

かれ柳や浦を離れて橋ばかり　宗祇
雲やすき夕べの雨の夢の外　未徹
かれ柳ふるきくるるの人の　浮美
門川乃ふるたちもかれ柳　イヨ　茶寿
柳や散きたるもとすかの家　弁室
行すりて家八又くまりかれ柳　柳丸
柳枯くるるの門田の　鼎
小九郎ともりも魚くる柳　勢二
ちるひかくるるかくるる　牛後
濱柳は行みの末之　月化
幸ふれ又ふてふ雨みの末之　細芝

帰花

大川ふるてあくるみの末ふ
みの枯くるかくるの末八かくるの山
山ふるかみの末の年ふさすかる日
松山乃雲八ふかくるかくるふ
雪かふるきものくぬゆ末之
ふるの山やふくるるのみ末之
世ふるふれかねてや帰ふ形
かくくくの中ふ新ふ　海苔
海苔月ふとはたもふくるれ之
道ふくくや弱くるるの帰苔
行の末ふるの返ふ形　かてむ

馬頂　重塊
老姑　二有
ふる　百尔
蔦之　文角
素徒　牛後
ふる

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

枇杷花

[illegible]
枇杷咲[illegible]
[illegible]
[illegible]

山茶花

[illegible]
山茶[illegible]
[illegible]

清水
生白
氷石
[illegible]風
[illegible]
二有
瑞馬
魯江
[illegible]山
[illegible]
[illegible]

山茶花

[illegible]
咲[illegible]
[illegible]
葉の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

石蕗花

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

牡丹

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
白涯
[illegible]人
何樂
[illegible]項
[illegible]六
蕉葉
[illegible]
[illegible]
竹栖

水仙

水仙の花はなかば白きは清けれ　春坡

雪ふれど笠にまとふ水仙は　柳居

霜乃葉をとゝのへて咲ぬ水仙も　仙芝

水仙の葉花うちよりも折ぞく　未徹

水仙を蔥ともわかず匂ひけり　白涯

鳥啼て水仙匂へる日南の垣　紫孝

水仙を柳乃まへの垣根の雛　有隣

寒菊

寒菊や乳やちるばかり花盛り　甚兼

寒菊や霜にも清ける朝日影　桃宇

寒菊や錦ときく見よりつけり　鴻馬

寒菊やくもり日や松の上　文岱

寒菊の錦をきたる朝日かな　擲浜

寒菊や日ひかけて松の文ぬ　路京

薮柑子

薮柑子垣にはらわれ日南の菊　花影

落月につくたびあそぶ枯尾花　手影

枯尾花

ちるたびに月も隠さし枯尾花　鴻高

菊河るものかくす花ハかれ尾花　亀半

ゆく雲の尾かゝなりぬ枯尾花　重境

絵をせくとく雪の中き枯尾花　棲宿

くれりに月折れりかれ尾花　菊也

罪なき風に吹れて枯尾花　呉暁

枯尾花はや尊にかへりてまたひかり　不乙

枯芒　枯なる芒ありの乃ぬ山の邊　仙蓋
枯萩　山畑や紅葉ひおす枯すゝき　徐来
枯芦　こうひさぐ枯人こまる萩乃声　美坡
　　かれ芦よまれて出る月　一溪
　　芦かれて枯のかけてる入江の　歩行
　　芦枯く枯ハ満汐と物うらゝ　白雁
　　かれ芦の中ゝ出る小舟　枯月
枯菜　ふみをかれ菜まさす日ハ　未徹
　　きくかれ〳〵ゆゝ言よこうろ　圓友
枯蓮　枯蓮やこまる枯の面　象海
枯苔　かれ〳〵や屋ゝ結ゝ苔の　英人

戸をゝてゝ枯こむ苔小　或義
かれ苔よ面のゆゝ戸にう邨　重塊
枯人ゝて言ゝよゝゝ苔小　南溟
ゆゝくゝ　枯苔の中ぬ色ゝの苔　比良
苔　馬塚やかれ〳〵ゝ乃苔　碧文
枯蓮　枯蓮ゝ面菜ゝゝゝ　圓文
枯蓮　あゝる枯の れて分つくかゝ　嵐文
　　ひゝ四よ枯の乃乃ゝ　千秋
　　雜役の蓮ゝ苔小枯枯小　一溪
　　ゝゝ苔枯ぬゝてゝ枯の小　令義
　　ゝ枯やかゝの中枯ゝ接　茅川

かれぬ木をおもあるかれの小
さゝ笹まてかれの山乃澤
松嵐や松くゆく雲のうれ者
夕野のぬゝも草ゝる松原の
義書や苔も苔をあて乃宿
雲もかゝれて義を生ゝあ乃
もつかり世のあゝさ乃やみゝ據
八瀧ゝよゝ国家乃ゝ
みゝかゝ人ゝる白ゝ生ゝ
ゝる松ゝ西ゝもゝろゝ
小ゝゝや浮世乃ゝ国この世

義函
牛後
書六
馬頂
小洋
書窓
有管
花糸
暫之
書柳
牡芳

義卷
義據
小忘国

小乃忘ふゝけゝもゝや
みゝこゝもゝ
松ゝる
ゝのゝる
みゝこゝる
ゝゝゝゝ
塩炎のゝ
松のゝ
よゝ松ゝ
ゝゝや
おゝの八

義
義
義
義
義
義
義
義
義
義
義

杜由
升六
文角
書窓
紙山
笑嵐
桃源
たゝ女
魯江
蒙石
桃子

茶品

興趣集

にはやけんとうやしき　香椒

山氏とや歌をよめるろくろさし匂ひ　白滝

物をもる大内山のみるろくろの南　斗石

猪物うつのうちにくみろくるとぶ　燕巣

宇治山やみろくりの方のこかくれ　安之

水をもるも明るもる火桶の那　升六

火桶

あつ板や敷白のおの相火桶　葵亭

かれくてなのうの戸に入る火桶哉　一陽

哉の物をとぶ入る火桶哉　宇柏

清るかる物もある板乃火桶ぶ　義風

埋火

嘯はの板を燈火のあかりうを　重信

埋火や人乃老

埋火やこうろうまるの面板の南　雨芳

こうこ火やしろしろまる板の山　圃友

埋火やちのこよある板乃身　倭風

こうこ火をとうまく葱の白ぶ　漱石

埋火

埋焚くくし寄よひう淵ち　柳九

藥乃角よ小鴻泊たる火ぶ　素楚

火陣

柳柳の青も板ゆもる火陣ぶ　珈亀

ゆるまんう堅山蜘めく火をちぶ　春哉

朝をまうろうめくくく火陣哉　二有

ゆうもちくて只居るや陣ぶ　宗徳

沙雨

火鉢

炭

炭竈

炭焼

紙衣

日はまだく舟の出てるかくこゝの冬　仙芝

紙子着て薄子持て行くろの水　白涯

かくこ着て尾谷乃衣を洗ひ姫に　逸栖

宇治山の白も見しよ着る紙子かに　二有

植縫る笠山うかり乃紙子哉　支哉

頭巾

僧はよの嵐をもちて頭巾かな　、

翁忌や頭巾てらす菊かな　有隣

せうそこ鞍をつゝて見る頭巾哉　墨橘

ちうりとえの簾つて頭巾かな　宗迪

蒲團

草臥てたり身にも蒲團かな　松月

衾

老ひと放ありろうなる衾かな　不説

せつけされ寄も放する入金屋の部　赤徹

家かけの水るにきてすあかろ哉　方之

網代

夜寒殊くあうりもありて網代守　二有

網代守ひと放すき夜八月れ川　南嶽

志る人と見る八松のよの行しこう哉　雨蒼

至しき薬君子来う網代守　四州

舟よ乃や新風しよ来る衛　升六

千鳥

啼そろ千鳥放中の小挑灯　五寅

かれ菊寄鳥して行く千鳥　白涯

寄るあ千鳥月の衛せしれ　和夕

夜明や菽乃奥にも鳴千鳥　汝不

為頂
有笠
嵐角
陽言
里樵
柳士
宗徳
一陽
柳拙
玄回
二有

聲奏

山鶯の風の逢ひを鳴ちとり
柳のえだに風のふるえを
ちるなりとうぐいすの音
枝をうつるきくやむくまの
柳をもてらきてみるうの後
音鳴とかのようにて聞の傳
鶯うとうとれてみるうれ聲
時ゝ事ゝ聲ゝ柳ゝ
ゝゝれ聲ゝ
柳ゝゝ
聞ゝて

老柳
ゝ笛
乖梅
浪士
升六
英哉
云く
南須
玉宮
性風
この友

蟬

許宣
白
米紀
方隙
金義
增人
蒸物
蓼蟲
老姥
雲坊
增人

蛩

里彩
方廟
仙樂
許極
百象
白涯
小洋
牧朱
沈石
一湯
古

鳥雲

鶺鴒

木兎

鶯

寒苦鳥

飢くや庵凄し[illegible] 鐵山

毎夜〳〵来れとかなしき[illegible] 梅宇

山深の寒さ[illegible] 玄周

[illegible]火も[illegible] 皿明

[illegible]てもなすこそ[illegible] 一陽

木兎[illegible]よりあるあはし[illegible]鶯 澂石

木兎や木の[illegible] 英仁

鶯乃[illegible] 吐雪

鶯の[illegible]つけて[illegible]鶯 白雉

[illegible]や[illegible]たて[illegible] 一陽

[illegible]寒苦鳥 棲士

寒鳴

寒の鶯

喰鶯

[illegible] 二有

[illegible] 弥寸

[illegible] 楙氏

[illegible] 子歌

[illegible] 麻佛

[illegible] 桂庭

[illegible] 蘇宇

[illegible] 蕉之

[illegible]や[illegible]の松 一陽

[illegible]の[illegible] 南嶺

[illegible] 智之

おもうつる皆思ひ〻の一年　蓬壺
今年やすしうしの教うしは　笑考
紫漬やおもひたてうる年の春　雪山

十一月廿日

霜月

霜月の田を耕はるいとまなし　千鶴
霜月は鄙さかれかの家の角　春
霜月乃まもる月六日の朔　英雄
霜月やうつるりきさき山のうち　燕柳
霜月の何のうしの吹〻はつ春　蒙孝
霜月の元日やさやかなる角の音　羽冠
霜の色乃人の通ひくる事　宇柏
雀よりつるるかるかの朔　仙芝
波夫のかけよりあるかるかの　春成
あるかるそおもふ元しておき年代　老胡

月ゆくうる暦のかすむみそ霞
年貢すむ里の世のゝやみそ梅
神乐 新月のゆの神こゝきゝうゝ梅の月
おかゝゝや風もいるけの梅かゝる
里神乐 梅の宮ゝ梅をおろすし里神乐
ゝうゝ代ゝ雪ゝまひゝきゝ夏雪ゝ
燎 ゝ火焼やゝゝの中ゝ雪ゝ松
山ゝゝハゝの中かゝる燎ゝ乐
焼火焼やゝゝも出ゝる意図
子乐 ゝゝめゝも既出ゝゝ
雪 ゝを雪ゝまゝせて松かゝ

星影 芳之 元概 蓬意 蓬莱 奥乐 高梅 雪月 踏房 踏言 石来

雪ゝ舟ゝ小舟の乐
雪ゝ沼九乐ゝ雪ゝ四合の乐
雪ゝ雪ゝ雪ゝ雪ゝ雪ゝ雪ゝ
ひゝゝゝ雪ゝ雪ゝ雪ゝ雪ゝ遠入戸乐
雪ゝ月ゝ雪ゝ元ゝゝゝ門の山
月ゝ雪ゝ雪ゝ雪ゝ雪ゝ雪ゝ梅山
海月の照月たゝ雪のゝ 踏馬
何ゝゝ乐ゝ乐ゝ雪ゝ乐 牛陵
大雪ゝ月ゝゝゝ雪ゝ乐 花陽
雪乃雪ゝ雪ゝ月ゝゝ乐 月哉
雪ゝゝ踏ゝ月ゝ雪ゝ乐

仙雪 越山 菱亭 文枝女 白涯 李彩

[illegible]

行くすゑの雪の名すゝ紅

行人の袖よりゆるやかれ乃ゆき

うゝれ尖を行の舞乃雪れ降

汐の音すゝ際を雪乃名白れ

月おゝ雪八降ゝ名ぬゝ

隣ゝ雪れ雪れ雪れ雪れ小雪れ

雪れゝ月数かゝきこれ

名ゝ名る枝乃雪中雪ゝ

ゝ雪中雪ゝ又雪名乃人

大雪れ雪れ雪れ水の流れ

梅花
梅村
六樂
節文
急仙
四時
象笑
又寛
形乃
生白
冰石

都住の雪を雪ゝすゝ和の白

大きれる鳥花乃ゝ雪れ生ゝ

雪雪雪ゝ月おゝ雪ゝ雪ゝ

雪雪雪ゝ枝の和ゝ小雪れ

雪山の和雪ゝ枝の和ゝ小雪れ

爽山ゝ和雪れ大雪れ雪れ

雪山ゝ雪ゝ雪ゝ雪れ和ゝ雪れ

宿ゝ和ゝ雪れ雪ゝ雪ゝ

ゝ雪中雪ゝ雪ゝ和の雪

和ゝ雪れ雪ゝ雪ゝ雪れ雪ゝ

雪車
爽
雪吹
霧

或尽
蒙石
夫哉
花鶯
梅香
燕柳
老姑
和水
浮雲
仙茅
古梁

知りて八月のきわ過くなられの秋
暮れ〳〵たる夕ぐれ
あれ〳〵と思ふおもかげ
朝ぼらけ
業の戸ぶ
ひ〳〵きうくるる
信濃
行ふ
〳〵
菜摘
杉村の中れ

乙竹文吉
同
玄同
常川
南源
子新
重仁
燕雀
素樹
生白

夕雲
清波
夕雲
清水
月波
夕山
月
杉村の中
秋
月波
夕の月
夕の月
出る
夕の月
夕山
月
杉村の中
秋
月波
夕の月
夕の月
夕の月
出る
夕の月

升占
由来
千枝
吹風
文寛
酒房
士朔
鶴翼
小洋
吐山
有笠

[illegible]
刀研くこゑ竹の文の月
松風のおとにはれて出るみ乃月
夕月や新刈る香やみの里
雲絶えて高山やみの月
大空のぬくもりさえて雪月
梅の香に乃とれて匂ふ雪の月
志ゝ濱や蟬鳴なくなる雪月
みの原やなかれて雪の月
大ち原志ゝうゝ[illegible]ぬ雪月
名鄙くゝ海ちゝゝ雪の月

義糸
文雪
祖冠
東路
栄女
道宇
金井
二有
生白
文陽
斗石

雪月夜
みの夜乃只相りゝ乃き小雪月
みの月夜やとゝ雪にて也海の雪
みの月や濡て八わゝく門乃山
みの月の絶えて義ぬ子山
きゝ[illegible]ゝ雪乃さゝ谷月
みの月や宿ひ雪ゝ[illegible]
みの月の[illegible]ゝ雪ゝ[illegible]
通ゝ雪月ゝ[illegible]
みの月や[illegible]
みの月乃孫のゝ雪あゝ乃

柳土
土朗
宗雪
義雪
巣男
[illegible]柳
[illegible]樹根
麒一
仙芝
何軒
宇柳

題目

冬され

冬枯

水涸

樂堂
柳澤
故侯
增人
義京
豪潤
燕亟
義季
橋支
一陽
玉素

冬水

冬川

冬海

机山
燕柳
来報
仍堂
增人
蕉葉
葉富
一陽
きぬ女
文角
杜由

冬山

罪なすはなしとあらでも冬の山　白涯

けふ見れば古びてしみし冬のやま　芳之

枕とする日の旅人にさしかへ冬の山　嵐丈

戸口迄かけさればはや冬の山やま　千歳

冬の山手もなき山路の風　乱山

冬の山まが所たゝしく冬の山　仙洲

冬籠

冬籠松くさる庵の冬籠　雲去

むぐらの宿も冬籠　玉粒

麦蒔

麦蒔や冬の山畑の冬日和　仙洲

麦まきて二日かゝりて風の月　蕪京

大根

舟にて大根洗ふや芦の宿　千軋

山寺の庭乃大根引すがる　月化

志賀の大根引　千梅

夕暮の身に添ふ大根車　康乙

茎漬

茎漬の冬の夜すがら　凡鳩

山里は寸志八つめ茎汁　仙草

松長引

こほれし松長引入る深山の風　雲仁

松風の耳に音なし松長引　南溟

薬喰

冬の松を妙にくる薬喰　寒松

獣喰ふもの松しく　桂庵

河豚汁

河豚汁やこの夜枕の月ならむ　蒼帆

家ふかき鍋にもくらき　一枝

もつてやはらかなる小松原
鶯をなつかしみ春の日傾くまで
ながめくらしぬまくらにかほる梅
かれ萩をまつもむらさきの秋
竹の戸は鶯のなくやぬくらけ
鮫好乃和こ文こりうりは
こゝ火も奥の池や 鮫の宿
鶯のちりぬてみうたまはの
竹風 味ゆうはぬせうは
鶯よりうるはてみる海嵐
こゝかゝ波のたゝえ一ちまこ

子新
雪仁
紅芝
六響
陽馬
紫春
何樂
自笑
風坊
二の文
夷仁

玉子汁
生姜汁
生酒嵐

鱠
杜文魚
新名

かもの川の清きもたゝすは海嵐
鱠にあるよ雪ほこるゆよ一ろ郭 孟
杜文魚やあれよ板をうるの山
雲の海月の下れうきもこゝ
山うれて尾くかゝ鶯こえまう
こゝ山よりの入るみこゝ雪よりう
山のみ孤しきものの八月新し
みゝ半ゝいつゝなゝ浦の秋
みゝ向の春こゝちゝ小ちゝ
大義やこゝかゝ形るの声
新あゝて蓼の中よみのふ

牛庚
弁里
風坊
夷坡
東隆
夷和
百龍
左衛
古梁
文芝
女
蓮柳

師走

十二月

仙芝
六磨
いちや
卜仁
羽尉
鶴百
仏手
丈粒
頂付
古果

八月　八月やわらぬ葉もみぢの深
八月の初入なるゝ月ゝ
八月やはつ雪しるし冬の時
八月やれいの月見の
八月乃山風ふるよ雲ゝの乳
八月や崔乃あたるこゝろ家
第ゝ雲ゝ雲や四季のゝ
秋八雪ゝ雲ゝ雲ゝ雲ゝ
ゆる暦後ぬなかれや龍田川
月も日も翌八あらし雲暦
長かりゝ雲ゝ雲ゝ樣のかれ

陽ゝ
蕉葉
有隙
蒸柳
蒙者
廉乙
園丈
仙翁
弱庵
九蕭
子氣

寒ゝ

古暦

寒ゝ

あ吳ゝ雲ゝ傳ゝ雲ゝ雲ゝ
雲ゝ雲ゝ日ゝ八ゝ雲ゝ山ゝ雲ゝ
雲ゝ雲ゝ雲ゝの雲ゝ雲ゝ雲ゝ月
雲ゝの声ゝ雲ゝ雲ゝ雲ゝ
ひゝ人ゝの雲ゝ雲ゝ雲ゝ雲ゝ
夕ゝ雲ゝの雲ゝ雲ゝ雲ゝ人
見ゝ代ゝ雲ゝ雲ゝ雲ゝ雲ゝ
行ゝ雲ゝ雲ゝ雲ゝ雲ゝ山ゝ
雲ゝ雲ゝ雲ゝ雲ゝ雲ゝ雲ゝ
雲ゝ雲ゝ雲ゝ雲ゝ雲ゝ雲ゝ
雲ゝ雲ゝ雲ゝ雲ゝ雲ゝ雲ゝ

和泉
莫囑
奥心
沐石
昇
生子
拙宗
拓麦
弗定
楚濤
魯江

寒月

寒月や海一すぢに浪くもり　不窩

ゆくやしと宮川の寒の月　洗良

ちさくても風格有けり寒の月　不洗

寒月の戸をさし出すや浮名かな　一陽

あかりの寒さや我くらく寒つくり　仙芝

寒造

我あつり寒さ廉も有りし寒造　遊柳

難錦子行ならかりつ寒造　梁石

毎年や筆尚可ひまを寒つくり　耕文

艾キ

居酒屋声行をせかりかんつくり　蕉果

あるまや子供に笑るる寒造　笑雀

毎年や気はさみし入寒造　白涯

寒声

寒造も一笑八山乃声ふくられ　松宅

大寒に声をうつさし寒流くり　斗石

寒声のかれ木の中を通りけり　瑞石

松風や家寒声も遠くなれ　浮水

寒声乃我文に加わる洞の水　習之

寒声れおくかわる東門の窗　有管

寒鮮のうしろに寒し松の月　一陽

寒念仏

寒念仏聞くかく厳夕への筆　道白

和尚に月の入るや寒念仏　圓丈

ひとねへて絶くなるく寒念仏　卜仁

松あれて月も出てけり寒念仏　苑陽

言葉遣
詞

言ねの川霧かけてを嬉しく
言まあり山のはるゝ月の
数かけやいつもわすれぬ袖たゝま
なつつまやの風勢もちるゝ所
はしをゝ文一よ来る袖所
はちの所言まのきまるてゝ
小家ゝ嶋入よりゝちゝ紙
藤ゝ枝れを戸ゝ袖所
下赤やおさえたけはち所
温えをを一よ来る袖所
はちたゝよゝ仙桃ゝ再ゝ

来旭
不浪
士朗
藤宝
南源
皆人
費庵
鈍房
有管
玄く
桃源

袖ゝ玉たゝ紙て入ぬ所扇戸
ゝ枝えん月の藤ゝ袖ゝ
言ゝ形る言を風情やゝ所
ゝ枝ゝ所ゝ袖ゝ言
言ゝ枝の上ゝ言ゝ言
言ゝ枝乃ゝ所ゝ言ゝ
言ゝ枝や仏やゝたゝぬるのゝ
言ゝ枝や千ゝ言ゝ二ゝ紙
言ゝ枝ゝ言ゝ言ゝ言ゝ言
言ゝ枝ゝ言ゝ言ゝ言ゝ言
言ゝ枝ゝ言ゝ言ゝ言ゝ言

又寛
慈郷
初冠
来和
珍雪
梅士
花京
又左
玉来
仙源
金宗

年越

鰯刺

尼拝

煤掃

一本清てるをとる赤つくよ
ちりろ雲のぬくこや子孫
たるちや内侍ところの赤の雲
はるさきたるこうしろ
多つや治葉こつてさ鰯
人の年てちよ刺ちろ山の方
内鰯ちるこ
雪ちろ松こつや尼拝
煤掃てこ
すこやや伝ちすれ
煤掃の年をぬけ行者

鷺
頂白
子報
行白
白涯
桃源
燕園
葉葉
者武
方孫
孫云

餅搗

年肉養

年忘

すこやや抜ちるこめ
煤掃こ人年すれやひるの月
鶯方子ちるこ
すこはこひ
大原や年忘てのこちも搗
年越抜乃月夫これこの内
内ここと義こ人このこ
こ内のこてるこ三十日
遠屋雲こ内ちここ
こ内の年八年こ一日
家宿や報ちる日をこ

一隅
義葉
松宅
桃中
一葉
伊報
水葉
樓房
美和
南始
井眉

一陽
芦丹
鬼園
雪六
陳石
藥風
文光
文宣
二有
芦丹
美坡

如圓
一陽
桃里
陽馬
宋也
蕉葉
文新
一陽
榮孝
小倉
美坡

年書

情うりて少なるも嘆くとて丸末
挑やまさらのぬけてくて情
芸東実つくて東西冨たる年の書
柳のあめ中ま蓋くくれ
夕点のゆくるを似すのの
あれやうまくくを書し伴吹山
賢稿も校かへぬくくれ
くれひとつやはまれ
ちくあめのるへやるれ年
すなかなるれをりくて年の書
くくの書をつるぬ書つるの書

白涯
耕又
西河
仙芝
廿
逗柳
乙彩
仙路
麻柳
丑寅
方之
彩雨

くくれくれちくとて八ふく年くれ
杉挑くはまもりくぬくくの書
年のくれ麿くかれき浅くれ
冨ちう猪ゆくくめゆ一冨
麦ま丁くくくれくれ
ちくくくやれ沸き風る柳ちち冨
くくれ猪市くを麦くかくう
杉のをやれくくよくを年の猪
大三年日書るのくれひもちる書
大くくやをまくくゆる書れやを
大年やをくくを書き枝乃人

年守
年籠

大三百
大年

宇洋
素潮
栄廿
玄く
未記
荒角
枝来
有踊
魚蔵
升六
比良

其中書屋

雜帳抄

[illegible]

松風も秋を押けるさゝ[illegible]

文雪
有笠
宣白
金義

皇都書林

寺町二条下ル
橘屋治兵衛

寺町御池通下ル
橘屋嘉助

寺町蛸薬師下ル
伏見屋半三郎

室町中之貫上ル
平野屋善兵衛